

学生時代と図書館 40

予期せぬ本との出会いの「場」

永松 雄彦

いわゆる世のインテリ族がどのような知性の紡ぎ方をしているのか、つまり書齋から発する知性と称して、『私の書齋』と銘打った本が広く読書家を対象に時折出版されることがある。「研究者」や「著述家」、「篤学の読書子」を自称している人々が必要とする本を必要とするときに用いる。そのために特定の「本」を個人が収集し手元に置いておくのはしごく当然なことのように思える。結果として何千、何万冊という数量に達してしまう。これら蔵書の在る場所が書齋である。私の書齋＝私的ミニ図書館なるものがそのような理由で私達の周辺には点在している。それらの人たちにとって、その道の先達がどのように「本」を利用しているのかその秘密を少し垣間見たいと思うのは不自然なことではない。図書館をどう利用すべきかといった一般的な話より個人が「本」そのものとどう向き合っているのかそちらの方が面白くて知的スリルがあるからである。この種の本が時折出版されるのもこのためである。したがって、この現象は規模の大小にかかわらず充実した図書館が近隣にあったとしても変わらないであろう。私はといえば、私もまたこの現象に取り込まれた一人ということになる。

昭和30年代、中学や高等学校時代に友人の影響でよく放課後図書室に通った。万巻の書にかこまれた雰囲気は妙に落ちつかせるものがあって大変気に入っていたからである。手に取れるところにいつも本があるという安心感を味わった。したがって、これといって何かをするわけでもないのにそこによくいた。そのような経験から大学時代に下宿をするようになった頃、私もまた好きな時に好きな本が読めるという状態を、今度は図書館に求めるのではなく、意識的に部屋の中になら求めた。これは結婚してからも変わらない。

そういうわけで、大学では図書館を余り利用しなくなってしまった。必要な本は小遣いを工面し

て買うようになったからである。そのうち蔵書が増え読書が好きなのか本そのものが好きなのかわらなくなってしまった。とはいえ、「ことごとく書を信ずれば



書なきにしかず」の格言を無視し、読書するは信仰にあらざればかり乱読していた。あるとき、フランス文学や思想に魅せられそちらを志すようになった。さらに、文学はつまるところ言葉の問題につきるというたぐいの文章に出会うと今度はその「言葉」の問題に没頭してしまった。言葉の原理論をもっと知っておく必要にかられ、つき当たった本が小林英夫訳によるソシュールの『言語学原論』であった。この本は大学図書館にあった。この本は初めの一章から難解であったがこの本に出会えたことは、今から思えば図書館利用の最大の収穫であったように思える。私は、この本を種本にして卒業論文を書いた。原本『Cours de linguistique générale』を入手したのはずっとあとになってからである。

1977年フランス・ノルマンディ地方のCaen大学に滞在した折、今度は大学図書館にせせせと通った。いろいろと目的があった。ある時、館員にこの本を探しているといってなぐり書きのメモを見せた。R. Englerによる『Cours』のEdition critique版である。しばらくすると胸の前に重そうにかかえて私の眼の前においた。館員は3kgはあるといって片目をつぶった。日本ではおよそ手にできないであろうと思っていた本。それがここにあった。このときから、私にとって、図書館は予期せぬ本との出会いの場となった。およそ欧米学を志さずのなら、原文資料に関しては断然当地の図書館での検索につきるということを知ったのである。そこでの本との出会いこそ、決定的な経験であり、また勉強のあり方さえもガラリと変えてしまうように思えた。勿論、パソコン検索万能の今日であっても、ある状況のもとでの「本」との直接の出会いを経験するその意味は当人にとって薄からうはずがない。

ながまつ たけひこ(教授・ヨーロッパ文明論)